

「信仰の道備え」

旧約聖書 イザヤ書35章3節～10節(p. 1116)

新約聖書 ヘブライ人への手紙12章12節～17節(p. 417)

- 1、待降節に読まれる教会暦の聖書テキストに古来ヘブライ人への手紙12:12-17が加えられている。ヘブライ人への手紙は「手紙」とあるが、紀元80年から90年代に描かれた宛名のない「勧告の言葉」(13:22)すなわち説教集である。これは、信仰に倦み疲れ、迫害や誘惑に会い、はては信仰を放棄する危険に陥った、おそらくイタリア(ないしローマ)のキリスト教徒(13:24)を念頭に置いて著された書である。10章32-13章は訓告的な部分である。この部分の大きなテーマは忍耐と希望である。なかなか心に染みる言葉がある。
- 2、11:1-40では、旧約時代のアブラハム、モーセを始めとする信仰の先達の話が語られる。「信仰とは望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認すること」だと。12:1-4では、「信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら」忍耐をもって馳せ場を走り抜くようにすすめらる。「あなたがたが、気力を失い疲れ果ててしまわないように」とあるから、きっと相当な艱難に出合っている者たちへの「勧告」であったのだろう。12:5-11では、父なる神の鍛練を重んじるべきことがのべられる。「主は愛するものを鍛え」とは「私を苦しめられたのはあなたのまことのゆえです」(詩編119:75)が投影されている。ここまでは、状況への受動的側面が強調されている。
- 3、今日のテキスト、12:12-17では、「キリスト者にふさわしい生活」への勧告が述べられる。「なえた手と弱くなった膝」はイザヤ35:3が、「足の不自由な人の歩み」は、足の進め方が道を確認なものにするという箴言4:26が念頭に置かれている。信仰生活の積極的・主体的側面が重視される。
- 4、キリスト者の生活で、「すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい」(12:14)とある。平和とは人と人との正しい関係である。聖なる生活とは、神との正しい関係である。自覚的に平和を生み出すこと、隣人と和解すること、そのことと、神を求め、神との交わりを与えられ、神の許しを受け入れる生活とは、切り離されてはならない事を言っている。生活(実際)と信仰(理念)の二元化を厳に戒めた言葉である。例えば、「地球温暖化」の現実(水没する都市)と会議(主張のぶつかりあい [cop15])が比喩になるであろう。「苦い根」とは、この二元化をもたらす根源を言っている。そうして旧約の古事エサウの話しが持ち出される(創世記25:32)。長子の権利という神から委ねられたものを、その場の弾みの一杯のスープへの食慾とを切り離して、二元的に生活したエサウの二の舞いを繰り返さないようにとの戒めが記されている。
- 5、恵みの到来という客観的な面をもつクリスマスに対して、待降節は、自ら信仰の忍耐をもって信仰の訓練をするという主体的側面が強調される。これなしには恵みは恵みと言いながら似て非なるもの、観念化されたものになる。そこでは上からの力が働かない。「自分の足でまっすぐ歩く」(13節)ことが、私達の信仰による日毎の生活、あらゆる領域への関わりに促されている。